

## 愛知大学公館

愛知大学豊橋キャンパスからほど近い場所にある愛知大学公館は、1912(明治 45・大正元)年 5 月に陸軍第十五師団長官舎として建設され、今年で 100 年を迎えました。



1917(大正 6)年に師団長となった久邇宮邦彦王くにのみやくによしの娘である良子女王ながこ(のちの昭和天皇皇后)も、ここで少女時代の一時期生活されました。1925(大正 14)年に第十五師団が廃止された後は、陸軍教導学校・陸軍予備士官学校長の官舎などに使われましたが、1946(昭和 21)年に愛知大学が創立されてからは、学長はじめ学部長の住宅として、その後は集中講義での外来講師の宿舎として二十数年前まで使用されていました。



現在は老朽化のため使用されていませんが、洋室と和室を巧みに折衷した造りとなっているこの建物には、シャンデリアや暖炉などが残っており、レトロな雰囲気は今に伝えています。2002(平成 4)年 9 月、豊橋市より有形文化財に指定されています。

## 百年前に建築された各師団長官舎

日露戦争後の軍備拡張により常設化された師団は、豊橋に新設された第十五師団のほか、第十三(新潟県高田)、十四(宇都宮)、十六(京都深草)、十七(岡山市)、十八(久留米)にも存在した。これらの師団の司令部は第十六師団以外、画一的な木造二階建の建築であったが、師団長官舎は和洋折衷を取りつつ、それぞれが独自の意匠をもった様式が取り入れられた。

豊橋以外で現存している旧官舎は高田(現 上越市)と久留米にあるが、豊橋の官舎が和風と洋風との折衷型の平屋であるのに対し、写真のように高田の官舎は外観を洋風とした二階建、(役場の建物を転用した)久留米の官舎は和風を活かした平屋となっており、今日なお活発に活用されている。



第十三師団長官舎(新潟県上越市)  
近年自衛隊から市へ譲渡され、移築、復元の上公開



第十八師団長官舎(福岡県久留米市)  
「高牟礼会館」として各種会合に使用されている

## 師団長官舎で暮らした歴代師団長

旧陸軍第十五師団は1908(明治41)年、豊橋南郊に新たに建設された衛戍地<sup>えいじゆ</sup>(駐屯地。現愛大豊橋校舎およびその周辺)に進駐した。その北側に離れて建築された師団長官舎の完成は4年後の1912年であった。したがって、実際に第十五師団長が居住していたのは、同師団が軍縮によって廃止となった1925(大正14)年までの13年間と、比較的短期間であった。

しかし、短期間ながらも、7人の中将が師団長として歴任した(年表参照)。そのうち、皇族であった久邇宮邦彦王第7代師団長(在任1917年8月～18年8月)の長女は、のちに昭和天皇の皇后となる良子内親王であり、同内親王が父の十五師団長在任時、ともに官舎で暮らしていた(注1)。ほかにも、廃止時の田中国重第10代師団長(在任1922年8月～25年5月)は、着任前年にはワシントン軍縮会議に派遣随員として参加した経歴を持っていて、軍縮が討議された場と、実際に行われた場の両方に立ち会ったことになる。



久邇宮邦彦王一家  
(豊橋での任期を終えて間もない頃)



田中国重十五師団長

第十五師団の廃止後、師団長官舎は新設された陸軍教導学校や予備士官学校(注2)の校長官舎に転用された。敗戦による旧軍解体後は、中国・上海の東亜同文書院大学から引き揚げてきた本間喜一学長らによって豊橋予備士官学校跡地に創設された、愛知大学の「公館」として生まれ変わった。

(注1) 学内には久邇宮邦彦王や裕仁皇太子(後の昭和天皇)などのお手植えの松が育っている。

(注2) 1925年の陸軍軍縮によって師団が削減された一方で、軍隊内の下士官を教育するための教導学校が翌々年に新設され、設置場所の一つであった豊橋では第十五師団跡の一角が転用された。豊橋の教導学校は1941年に、戦時下に指揮官を臨時養成するための予備士官学校に全面移行したが、その過渡期には教導学校長が予備士官学校長を兼任した(これも年表を参照されたい)。

(\*本パネルの写真は、いずれもインターネットのものを使用しました)

## 師団長官舎竣工より終戦までの歴代師団長・校長

### 第十五師団期（1912～25年）

氏名(いずれも中将)	在任期間	備考
内山 小二郎	1909.1.14～1912.11.27	在任中に官舎竣工
井口 省吾	1912.11.27～1915.1.25	
由比 光衛	1915.1.25～1917.8.6	
久邇宮 邦彦王	1917.8.6～1918.8.9	
尾野 実信	1918.8.9～1919.11.25	
市川 堅太郎	1919.11.25～1922.8.15	
田中 国重	1922.8.15～1925.5.1(廃止)	

### 陸軍教導学校期（1927～41年）

氏名(階級)	在任期間	備考
武田 秀一 (大佐→中将)	1927.6.30～1930.8.1	
川原 侃 (大佐)	1930.8.1～1932.9.1	
林 茂清 (少将→中将)	1932.9.1～1935.3.15	
中井 武三 (少将)	1935.3.15～1936.3.7	
常岡 寛治 (少将)	1936.3.7～1938.3.1	
伊藤 知剛 (少将→中将)	1938.3.1～1939.8.1	
石黒 貞蔵 (少将→中将)	1939.8.1～1940.8.1	予備士官学校長兼任
古閑 健 (少将→中将)	1940.8.1～1941.9.1	予備士官学校長兼任

### 陸軍予備士官学校期（1941～45年）

氏名(階級)	在任期間	備考
小田 健策 (少将)	1941.9.1～1942.12.14	
永沢 三郎 (少将)	1943.3.1～1944.7.14	
早淵 四郎 (中将)	1944.7.14～1945.8.31(閉校)	

#### (注)

- ・第十五師団の豊橋進駐前および、師団長官舎竣工前の師団長は省略。
- ・陸軍教導学校と予備士官学校が師団跡に併存していた時期(1939～41年)は表内のように校長は両学校を兼任していたが、ここでは該当校長は教導学校に組み入れた。また、豊橋市内西口町に移った教導学校が改編された「第二予備士官学校」の校長は省略。

## 愛知大学創成期の公館

愛知大学の初代学長になった林毅陸(元慶応義塾大学塾長)は、田中国重師団長と同じくワシントン会議派遣随員も務めたことがあり、また第3代学長となった小岩井淨(元東亜同文書院大教授)の妻で、中国大陸では婦人従軍記者として名を馳せた多嘉子(旧姓山岸)は、十五師団と同時に廃止された新潟県高田(多嘉子の郷里)の旧師団司令部に、敗戦後引き揚げてからの一時期居住していたという。旧陸軍施設や第十五師団・師団長との“因縁”がそれぞれにあった。



林毅陸 初代愛知大学長



(松山通義氏提供)

1946(昭和21)年11月の愛知大学創設時、管理元の豊橋市から提供された旧師団長官舎は「愛知大学公館」となり(のち買取り)、林・本間喜一・小岩井各学長をはじめとする教職員の、長短期両方における宿舎として戦後の住宅難のなか重宝され、本間や小岩井夫妻らは家族で居住した。そして、そこでは学生との交流も自然に行われ、「愛大の夜の学び舎」とも称された。

本間喜一第2・4代学長



小岩井淨3代学長夫妻とともに鍋を囲む学生  
(右側手前が学長、左側奥が多嘉子。越知専氏提供)

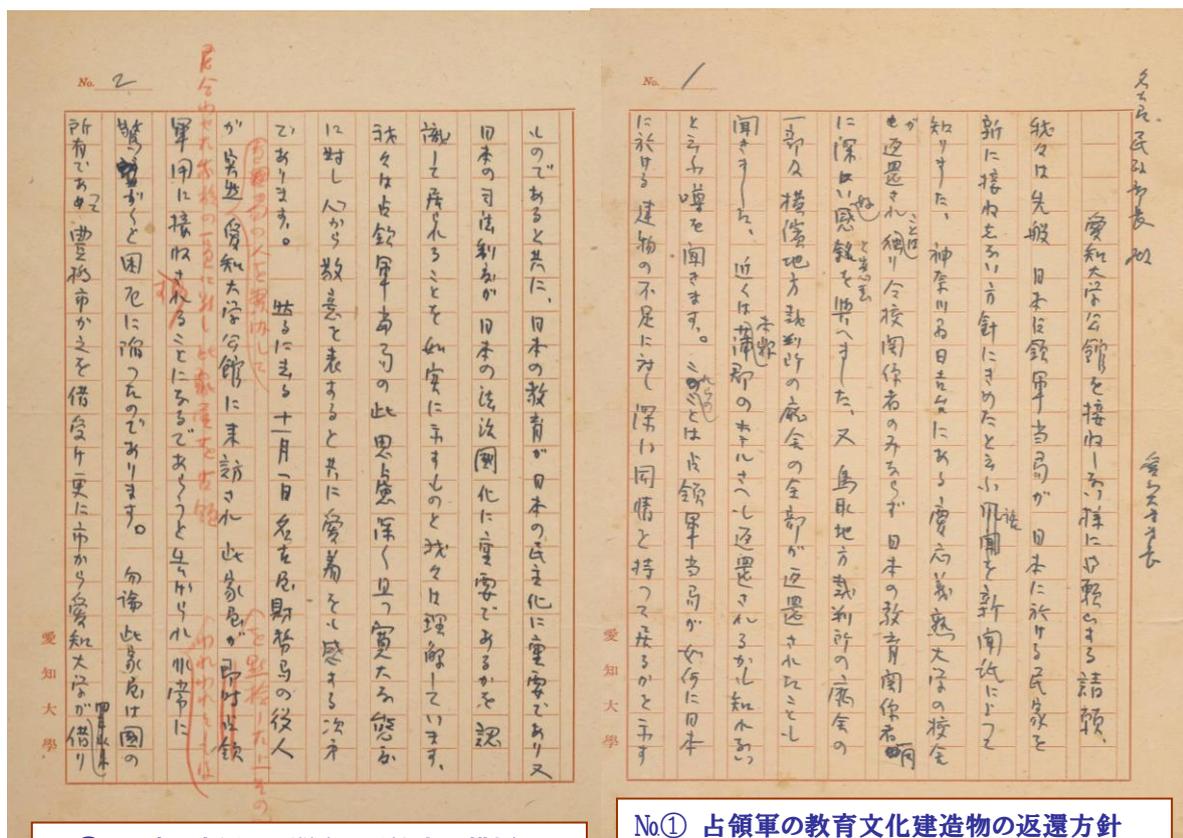
## 接收の危機を乗り越えた公館 ①

愛知大学公館を揺るがす一大事が、1950年11月1日にもたらされた。来学した占領軍係官（豊橋市長・名古屋財務局員も同行）が、朝鮮戦争勃発にともなう日本の再軍備に関連した「警察予備隊（のちの自衛隊）宿舎に使用するため公館を接收する」と宣言したからである。

これに対してはすぐさま、就任まもない本間喜一学長が、占領軍管下の名古屋民生部長に請願書を出した。

その中で本間学長はまず、占領軍当局が各地で接收した教育的・文化的建造物の日本への返還を始めていることをあげて、日本での教育の重要性を理解しているとした上で、土地の立ち退きを突然迫ることに関する民法上の措置の問題点を、商法上の賃借権問題と裁判での実例を示唆して説明し、民法でも商法でも、賃借権は所有権よりも事実上重要な地位を占めていると主張した。

さらに、教員学生が同一宿舎で勉学・生活をしている英国ケンブリッジ、オックスフォードをはじめとする各大学の理想的な教育環境の例と、占領軍の教育理念を示し、公館接收についての「寛大なる処置」を請願して結んでいる。その背景には「接收は避けられる」という最高裁判所初代事務総長であった本間の自信であった。



No.② 土地の立ち退きに関する民法上の措置

No.① 占領軍の教育文化建造物の返還方針

本間学長がしたための請願書冒頭の草稿（本間長女の殿岡晟子氏提供）



### 接收の危機を乗り越えた公館③

そのあと 11 月中旬に、小岩井浄学部長夫人の多嘉子氏が個人名で、マッカーサー占領軍司令官のジーン夫人宛てに日本文と、若江得行教授が翻訳した英文の手紙をそれぞれ送った。同氏が筆をとったのは、内助の功として自分にできることはないかと考えてのことであったが、その英文を見た司令部副官は、英語の文体がまるで「シェークスピアのようだ」と感動したという。

そして 11 月 20 日には、その副官の名で多嘉子氏宛てに「このことは誤解であって、もとより接收する意思はなかった」とする返書が届いたのであった。

その返書の一節にあった、「学校教育に便利ならば立ち退かなくてもよい」との占領軍の理解に対し、本間学長はすぐに謝意を学内新聞で述べ、

**嵐霽(は)れ心に協(かな)う秋の空**  
という一句も添えた。

GENERAL HEADQUARTERS  
SUPREME COMMANDER FOR THE ALLIED POWERS  
OFFICE OF THE SUPREME COMMANDER

20 November 1950

My dear Mrs. Koizumi:

Mrs. MacArthur has asked me to reply to your letter of November 17th in which you express fear that your house, which is rented from the Finance Ministry, might be requisitioned on procurement demand by the Occupation Forces.

An investigation of the matter has been made, and I am very happy to inform you that your fears are groundless. Your house will not be requisitioned, nor was there any intention to requisition it once it was discovered that the premises were connected with an educational institution. The published policy of the Supreme Commander for the Allied Powers has been for a long time, not to acquire any grounds, facilities or installations of educational or cultural institutions unless such acquisition is agreeable to the owner.

The Ministry of Finance, which owns the house in which you live, offered the use of this house to the Occupation Forces. Officers delegated to make an inspection of the house learned that it was occupied as a part of an educational institution. Since you say you were not present when these officers inspected, I feel certain that the language difficulty caused those who informed you of the inspection to misinterpret the words and actions of the inspecting officers.

I regret the disturbance this probable misinterpretation has caused you.

Very sincerely yours,

SIDNEY L. HUFF  
Colonel, Aide-de-Camp

Mrs. Takako Koizumi  
c/o Aichi University Official Residence  
75 Takasani-Ishizuka machi  
Toyohashi City,  
Japan

目下貴女様が、財務局より御借用中の御住宅を、進駐軍の調達令に基いて、接收されるかも知れぬと言ふ御文面の、十一月十三日附御手紙に対し、マッカーサー夫人の命により小官より御回答申し上げます。

この件については既に調査を終了し、その結果貴女様の御懸念が杞憂であつた事をお傳へ申し上げられるのは御同僚の至と存じます。御住宅の接收は致しません。又、原東、御住宅と教育施設とが緊密な関係を持つてゐると言ふ事さへ判明すれば、当方では接收する積りではなかつたのです。

既に発表されて居ります通り、連合國最高司令官の政策としては従来とも、教育文化関係の土地、又は附設の接收を所有者の同意なくしては、行はぬことにして居ります。

もともと御住宅の所有者財務局より貴宅の利用を奨めて居りました次第ですが、当方より視察の爲派遣されました將校は、御住宅が教育施設の一部であることを拜承致しました。

丁度貴女様が現場に居られなかつたとお言葉ですから、定めしおうわさを貴女様のお耳に入れました方々に、視察に参りました將校等と言語の疎通を欠くところが有り、誤傳を生じたものと拜察致します。

多分右様の誤傳の爲貴女様に御面倒をお掛け致しましたことを小官といたしまして、遺憾に存する次第であります。

敬 具

一九五〇年十一月二十日 聯合國總司令部副官 シドニー・エル・ハッフ大佐

小岩井タカ子 様

要 知 大 學

## 100 歳を迎えた公館

愛知大学公館はこうして進駐軍の接収を免れた。その1年後に調印されたサンフランシスコ平和条約により、日本は占領状態から解かれた。愛知大学はその後も、学内への警察官の立入り事件（愛大事件）や富山県薬師岳での山岳部遭難事故という“試練”を経ながら、発展の基盤を確立していった。その間も公館は、本間喜一や小岩井夫妻ら教員（およびその家族）と学生とのかけがえのない交流の場として、重要な役割を演じつづけた。

その後しだいに豊橋校舎周辺は宅地化が進み、教職員住宅も公館隣りに鉄筋づくりの建物が新築された。にもかかわらず、愛知大学公館は遠方から来学した外部講師の宿舎として使用され、愛されてきた。愛知大学のシンボリック的存在としての本館（現 大学記念館）に比べ、公館はキャンパス自体からは離れているため、いささか地味な存在となった面もあるが、小高い丘の上に立つ公館の存在感は、やはり愛知大学に欠かせないものがあった。



外壁がピンク色だった頃の公館（1980 年頃）

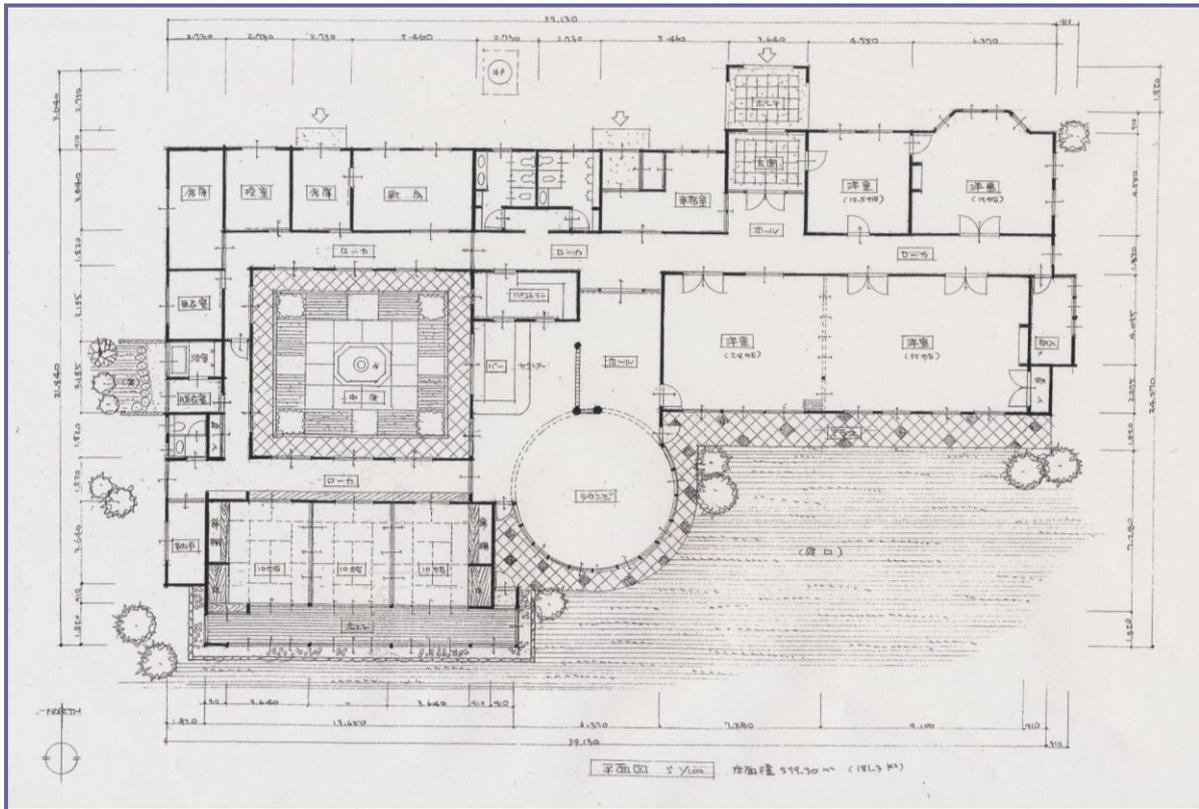
外来講師宿舎としての役目も 1980 年代に終え、使用休止の状態となった公館の“復活”を望む声は、本館の保存決定と連動する形で学内外より何度も出されてきた。とりわけ 2005 年の愛知万博（愛・地球博）開催の前には、公館を買い取って万博の迎賓館にしたいとの提案が地元の有力者から上がった。そして実際に話は進んでいたものの、当人の急逝により立ち消えとなってしまう、かえすがえすも残念であった。

しかし、2006 年の豊橋市制 100 周年を記念して製作された映画「早咲きの花」では、公館もロケに使用された。2002 年より豊橋市の指定文化財となった公館は、2012 年 5 月に 100 歳を迎えた。

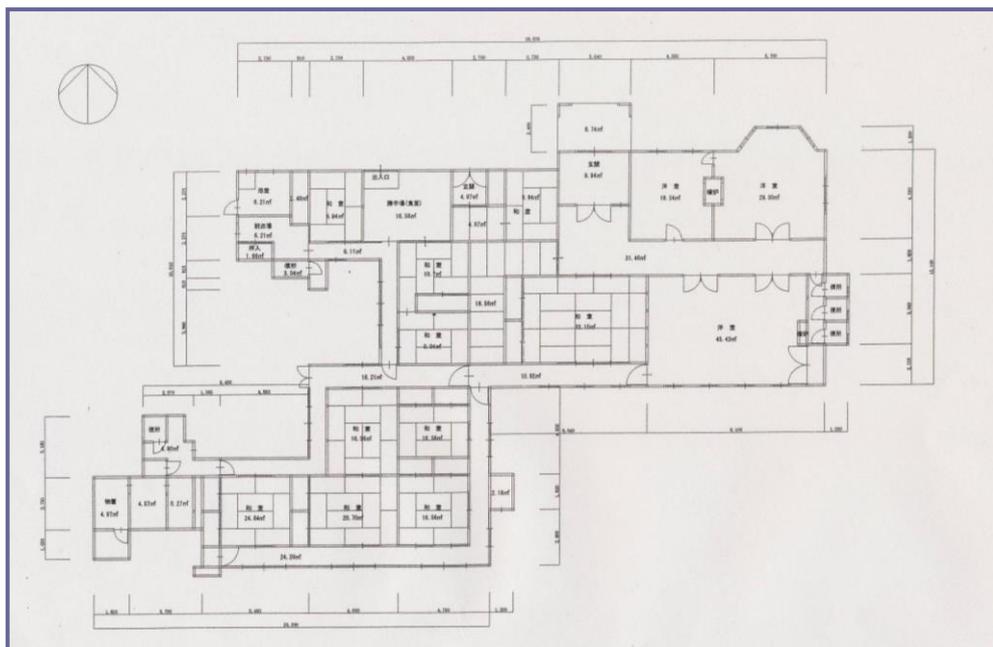
# 夢に終わった迎賓館構想

2005年の愛知万博(愛・地球博)開催前の迎賓館構想では、実際にこのような改築案があった。

## 《改築案》



## 《現在》



## 陸軍第十五師団長官舎、愛知大学公館関連年表

(表中の太字…本文パネル参照)

年代	師団長官舎、大学公館関連	豊橋の陸軍施設関連	地元の関連動向
<b>●第十五師団時代</b>			
1908年10月		渥美郡高師村(現豊橋市)に第十五師団進駐	
1911年7月		陸軍省経理局建築課、第十五、十七、十八各師団長官舎の新築計画を下令	師団進駐により豊橋地区には常時約1万名の将兵が駐留し、以後豊橋は「軍都」と呼ばれる
1912年5月	師団駐屯地の北外れ(現豊橋市高師石塚町)に第十五師団長官舎落成(現在の愛知大学公館)		
1917年8月	皇族の久邇宮邦彦(くにのみやくによし)王中将、第7代師団長に着任(～18年8月) ※長女の良子(ながこ)女王も父の任期中、師団長官舎で生活される		
1924年8月			4個師団削減の報が流れ、当局・住民の間で存続運動が起こるも、第十五師団の廃止は同年末に決定
1925年5月		軍縮実施により第十五師団廃止。同師団の敷地の大半が遊休化	第十五師団の廃止により、周辺地区の経済的影響が深刻化
<b>●豊橋陸軍教導学校時代</b>			
1927年6月	旧師団長官舎は教導学校長宿舎になる	旧第十五師団内の第六十連隊跡地に豊橋陸軍教導学校設置	1928年の中国山東省への出兵に地元部隊が動員される
1933年8月		豊橋陸軍教導学校の敷地拡張(現在の愛知大学本館周辺および時習館高校敷地を併合)	1937年からの日中戦争に地元部隊が動員される
1939年8月		豊橋陸軍教導学校に予備士官学校を併置	
<b>●豊橋(第一)陸軍予備士官学校時代</b>			
1940年11月	この頃、教導学校長宿舎が予備士官学校長宿舎になる	豊橋陸軍教導学校を豊橋市内の西口町に移転し、従来の敷地を豊橋陸軍予備士官学校に一本化	
1943年8月		西口町の教導学校を豊橋第二陸軍予備士官学校に改編し、豊橋陸軍予備士官学校を豊橋第一陸軍予備士官学校と改称	1941年からの太平洋戦争に地元部隊が動員される
1945年7月		西口町の豊橋第二陸軍予備士官学校の県外移転決定に伴い、豊橋第一陸軍予備士官学校を豊橋陸軍予備士官学校と再改称	6月の空襲で豊橋の市街地の大半が焼失するも、第一陸軍予備士官学校の建物は残る
1945年8月		敗戦により豊橋陸軍予備士官学校廃止(31日付)	
<b>●愛知大学時代</b>			
1946年11月	予備士官学校長宿舎は愛知大学公館となり、歴代学長・学部長の一部およびその家族が居住	豊橋市が管理していた旧豊橋陸軍第一予備士官学校歩兵隊跡地に愛知大学設立(15日付)	
1950年11月	占領軍司令部、愛知大学公館を接収する意を表するもすぐ撤回		愛知大学の新設や新制中学・高校の移転・開校により、旧第十五師団敷地周辺が文教地区に
1960年代	愛知大学公館を集中講義での外来講師の宿泊所に転用		
1990年頃	愛知大学公館が使用されなくなる		
1992年12月	愛知大学公館を保存する方針が定まる	当時の愛知大学本館(元第十五師団司令部)など、学内の旧軍建築物の一部も保存決定	
1998年1月		本館が文化庁より国の登録文化財に指定され、同年5月記念館として公開	
2002年9月	愛知大学公館が豊橋市より有形文化財に指定される		